マナーアップ
Improve Manners

「コンサートをお楽しみいただくために」

本日はご来場ありがとうございます。みなさまに心置きなく演奏をご堪能いただくため、九州交響楽団はマナーアップに取り組んでおります。

No Recording

□ 演奏中の撮影・録音は禁止です

演奏中の録音、録画は固くお断りいたします。すべてのプログラムの演奏が終了し、指揮者のおじぎ後は写真撮影をしていただくことができます。ただしアンコール演奏時の撮影・録音はできません。

No photography, filming and recording are allowed. All use of cameras and recording equipment is strictly forbidden throughout the performance. Once all the performances have finished and the conductor has bowed, you may take photographs. However, photography and recording are not permitted during encore performances.

Power Off

□ 電源はお切りください

携帯電話のマナーモードでも、作動しますと近くの方が気になる場合がございます。その他にもアラーム付き腕時計など、音が鳴らないようご配慮ください。

Before the performance, you must not forget to turn off your mobile phone. Even when it is set on silent mode, if it vibrates it may disturb people around you. Please also make sure that your wristwatch alarm, and any other electronic devices, do not make any noise.

Please Enjoy to the End.

□ 最後の余韻までお楽しみください

多くの演奏家は、最後の一音の余韻が消えるまで集中を保っています。一瞬の静寂の後の怒涛の拍手は、感動を何倍にも味わえます。拍手や「ブラボー」の掛け声などのタイミングには、お心遣いをいただきますようお願いします。

Please enjoy the entire performance until the last lingering sound fades out. Most musicians playing in an orchestra maintain high concentration until that point. Your loud applause after a moment of silence will contribute towards a much more impressive ending to the performance, for everyone concerned. Bearing this in mind, please take care to choose the right timing to applaud and cheer (for example,"Bravo!").

Hearing Aid

□ 補聴器のご利用にはご注意ください

補聴器を正しく装着されていない場合、音を発する場合がございます。音漏れがないよう、しっかり装着し、適切な音量に調整をお願いいたします。

For our guests who use a hearing aid, please insert the device carefully. If you do not do so properly, it may emit a noise. Please check that it is firmly attached and set at a suitable volume.

2026 6.12（金） 開演時間 19:00

アクロス福岡シンフォニーホール
ACROS Fukuoka Symphony Hall

第440回 定期演奏会

The 440th Subscription Concert

「ワーグナー旋風」

指揮 Conductor **ユベール・スダーン** Hubert Soudant
ピアノ Piano **中川 優芽花** Yumeka Nakagawa
コンサートマスター Concertmaster **西本 幸弘** Yukihiro Nishimoto

リヒャルト・ワーグナー
Richard Wagner

歌劇『タンホイザー』より 序曲とヴェーヌスベルクの音楽

Tannhauser: Overture – Venusberg Music

フランツ・リスト
Franz Liszt

ピアノ協奏曲 第2番 イ長調 S.125 / R.456

Piano Concerto No.2 in A Major, S.125 / R.456
Ⅰ. Adagio sostenuto assai
Ⅱ. Allegro agitato assai
Ⅲ. Allegro moderato
Ⅳ. Allegro deciso
Ⅴ. Marziale un poco meno allegro
Ⅵ. Allegro animato

休憩 Intermission

クロード・ドビュッシー
Claude Debussy

『海』管弦楽のための3つの交響的素描

La Mer
Ⅰ. De l'aube à midi sur la mer
Ⅱ. Jeux de vagues
Ⅲ. Dialogue du vent et de la mer

主催：（公財）九州交響楽団
後援：福岡県・福岡市
（公財）福岡市文化芸術振興財団
NHK福岡放送局・（公財）九州文化協会
福岡文化連盟・九響後援会
助成：福岡県・福岡市・文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
｜独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：（公財）アクロス福岡

特別協賛：
村上ホールディングス

楽団員お見送り

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさまをお見送りいたします。わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。

© F. Fujimoto

指 揮　ユベール・スダーン
Conductor　Hubert Soudant

現在、東京交響楽団桂冠指揮者、オーケストラ･アンサンブル金沢の名誉アーティスティック・アドヴァイザーを務めるユベール・スダーンは、1946年、オランダ・マーストリヒト生まれ。ブザンソン国際指揮者コンクール最高位、カラヤン国際指揮者コンクール第2位、グィード・カンテルリ国際コンクール優勝に輝き、その後、メルボルン交響楽団首席客演指揮者、フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団の首席指揮者、東京交響楽団音楽監督などを歴任。その他、ベルリン・フィル、ロンドン響、ミュンヘン・フィル、ハンブルク、フランクフルトの各放送交響楽団、ドレスデン・シュターツカペレ、ミラノ・スカラ座歌劇場管弦楽団、ローマ・サンタ・チェチーリア管など主要なオーケストラと共演し、オペラの分野でもバスティーユ・オペラや、パルマ、パレルモ、ボローニャなどのオペラハウスで精力的に活動を展開してきた。2004年7月、ザルツブルク市名誉市民およびオーストリア・ザルツブルク州ゴールデン勲章を授与された。

東京交響楽団音楽監督在任中には数々の業績を残したが、2006年5、6月新国立劇場で指揮したモーツァルトの歌劇『皇帝ティトの慈悲』では年間ベスト・オペラ公演に選ばれた。また近年では、大阪フィル、兵庫芸術文化センター管、札響、愛知室内オケ、九響など多くのオーケストラから招かれている。

Currently serving as Conductor Laureate of the Tokyo Symphony Orchestra and holding other positions, Hubert Soudant achieved the highest honor at the Besançon International Conducting Competition and second prize at the Karajan International Conducting Competition. Subsequently, he held principal conductor positions with the Orchestre Philharmonique de Radio France and the Mozarteum Orchestra of Salzburg, and served as Music Director of the Tokyo Symphony Orchestra. He has also been invited to conduct major European orchestras and has been actively involved in the opera world, performing at Paris opera, Parma, Palermo, and Bologna, among others. In July 2004, he was awarded honorary citizenship of the City of Salzburg and the Golden Decoration of the State of Salzburg, Austria.

© Susanne Diesner

ピアノ　中川 優芽花
Piano　Yumeka Nakagawa

ドイツに生まれ育った日本人ピアニスト。2021年、クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールで優勝、および聴衆賞ほかもあわせて受賞。2019年以降ロンドンのウィグモア・ホール、デュッセルドルフのトーンハレ、ワイマールハレ、マリインスキー国際ピアノ・フェスティバルなどで演奏。クリスティアン・ツァハリアス指揮ホーフ交響楽団、ポルト・カーザ・ダ・ムジカ管弦楽団などと共演しているほか、ウィーン・コンツェルトハウス、リンツ・プルックナーハウスでも演奏している。2025年6月にはハンブルクのマルタ・アルゲリッチ音楽祭に出演。

2001年デュッセルドルフに生まれる。ロベルト・シューマン音楽大学にてバーバラ・シュツェパンスカのもと音楽の教育を受け始め、ロンドンのパーセル音楽院でウィリアム・フォンに学ぶ。2021年よりワイマールのフランツ・リスト音楽大学においてグリゴリー・グルズマン教授に師事している。

2022年3月、クララ・ハスキル国際優勝後初の来日リサイタルは大絶賛を浴び、以後大阪フィル、名古屋フィル、神奈川フィル、東京フィル、読響、兵庫芸術文化センター管、大阪響、都響、アンサンブル金沢といった国内の主要なオーケストラと共演を重ね、行く先々で絶賛されている。

German-Japanese pianist Yumeka Nakagawa, born in 2001 in Düsseldorf, is a prizewinner of renowned competitions such as the Clara Haskil International Piano Competition 2021 (First Prize, Audience and Children' s Corner Award), the International Robert Schumann Competition 2019, and the Jenö-Takacs Competition 2018. She has performed at major venues including Wigmore Hall London, Casa da Música Porto with Christian Zacharias, Yokohama Minato Mirai Hall, or Tokyo Opera City. Festival appearances include Vevey Spring Classic, Piano aux Jacobins, and Verbier Festival Academy. Yumeka studied with Barbara Szczepanska and William Fong, and is now at the Hochschule für Musik Franz Liszt Weimar with Grigory Gruzman.

解説 高坂 葉月（音楽学者／平成音楽大学非常勤講師）

19世紀半ばから20世紀初頭にかけてのヨーロッパ音楽は、伝統の拡張と解体がせめぎ合うダイナミックな局面を迎えていた。本日のプログラムに並ぶワーグナー、リスト、ドビュッシーは、その変革をそれぞれ異なる角度から体現した音楽家である。ワーグナーとリストはともに従来の形式にとらわれない革新を志向し、楽劇や交響詩といった新しい音楽を切り拓いた。とりわけリストは、亡命生活で困窮していたワーグナーを物心両面で支え、創作を後押しした理解者でもあった。二人はベルリオーズとともに「新ドイツ派」を形成し、音楽を文学や思想と結びつけながら、表現領域を大きく押し広げていく。

その影響は次世代に及んだ。若きドビュッシーはワーグナーに傾倒し、バイロイト祝祭劇場を二度訪れている。ローマ留学時代には『マイスタージンガー』や『パルジファル』を友人と連弾するなど熱心な愛好者だったが、その影響から次第に距離を置き、新しい音響世界へと歩みを進めていった。ドビュッシーとリストにも接点があった。ローマ賞受賞後にイタリアへ滞在していた若きドビュッシーは、晩年のリストと面会している。リスト晩年の透明で静謐な書法、たとえば『エステ荘の噴水』における水のきらめきは、ドビュッシーの水の表現へと連なる響きの先駆としてしばしば言及される。

このように3人の関係は、19世紀ロマン主義から20世紀の新しい音楽語法へ移りゆく流れを示す連鎖として捉えることができるだろう。本日の定期は、その連なりを辿る旅でもある。

歌劇『タンホイザー』より序曲とヴェーヌスベルクの音楽

リヒャルト・ワーグナー（1813 — 1883）

『タンホイザー』は1840年代半ば、いわゆるワーグナーの創作中期への過渡期に書かれた作品である。先行する『リエンツィ』や『さまよえるオランダ人』に続き、ワーグナーはこの作品で、人間の内面における救済と欲望という根源的な対立を描こうとした。

物語は、中世ドイツの伝説をもとに作曲家自身が構成。主人公タンホイザーは、愛と快楽に満ちたヴェーヌスベルク（女神ヴェーヌスの住む官能の世界）に身を置きながらも、やがてそこを離れ、地上の秩序と信仰の世界へと戻ろうとする。一方でヴァルトブルクでは、騎士たちによる歌合戦が開かれ、純粋な愛と官能的な愛をめぐる価値観が対峙する。ワーグナーは、これら二つの異なる伝承を統合し、聖と俗のあいだで引き裂かれる人間のドラマとして結実させた。

初演は1845年、ドレスデンにて行われている。その後、約15年の時を経たパリでの上演に際し、当時のフランスのグランド・オペラの慣習に合わせた大幅な改訂が施された。序曲とそれに続く第1幕の「ヴェーヌスベルクの音楽」もこのときに改訂されている。序曲はまず、厳かな「巡礼の合唱」によって幕開け。ホ長調の気高く温かな響きが広がり、救済への希求が象徴的に示される。しかしその音楽は次第に変化し、官能的で渦巻くような「ヴェーヌスベルクの音楽」へと進む。ここでは舞踏的なリズムと濃密な管弦楽法によって、快楽に満ちた異世界が描出される。この対比が『タンホイザー』全体を貫く主題であるが、序曲においては、それらがすでに凝縮されたかたちで提示され、主人公の葛藤と運命が予感される。

作曲： 1845年
初演： 1845年、ドレスデン
使用楽譜：Luck's
編成： フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、タンバリン、トライアングル、カスタネット、ハープ、弦5部

ピアノ協奏曲 第2番 イ長調 S.125 / R.456

フランツ・リスト（1811 — 1886）

ピアノ協奏曲第2番は、ヴィルトゥオーソ・ピアニストとしてのリストの野心と、作曲家としての探求心が交差する作品。特徴的なのは、全体が切れ目なく演奏される、単一楽章形式で書かれている点である。この曲が構想されたのは、リストが新たなジャンル「交響詩」を切り拓いていた時期と重なる。6つの部分から成る音楽が連続的に変容しながら展開するさまは、まさに交響詩的な発想と響き合うもの。

冒頭、第1部（アダージョ・ソステヌート・アッサイ）では、ピアノのアルペジオが静かに立ち上がり、予感めいた音楽が響き始める。第2部（アレグロ・アジタート・アッサイ）では鋭い付点リズムが緊張感を高め、劇的なエネルギーが噴出する。以降、第3部（アレグロ・モデラート）、第4部（アレグロ・デチーソ）と進むうちに、主題は姿を変えながら性格の異なる表情として現れる。第5部（マルツィアーレ・ウン・ポコ・メノ・アレグロ）における行進曲風の堂々とした展開から、終結部（第6部 アレグロ・アニマート）に向か

う推進力はすさまじい。ひとつの動機が多様な表情へと変容していく過程は、リストが追求した主題変容の技法の体現とも言えるだろう。

またこの作品には、色彩豊かな和声進行を礎に、大胆な転調が随所に現れ、音楽は絶えず新しい表情へと移ろう。さらに、第３部付近で聴かれる独奏チェロとピアノの親密な対話は、協奏曲でありながら室内楽的な繊細さを感じさせる聴きどころでもある。

作曲：1839 ― 1861年
初演：1857年1月7日、ワイマール
使用楽譜：Kalmus
編成：フルート３（ピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、シンバル、弦５部、独奏ピアノ

『海』管弦楽のための３つの交響的素描

クロード・ドビュッシー（1862 ― 1918）

『海』はドビュッシーが41歳から43歳の頃に作曲された。30代で書いた『牧神の午後への前奏曲』によって高い評価を確立し、さらにオペラ『ペレアスとメリザンド』の成功を経て、独自の音楽語法を成熟させつつあった時期のことである。パリ万博で出会ったガムラン音楽の影響を思わせる響きや、全音音階などの大胆な語法を取り入れた意欲作であったが、1905年パリ初演は成功しなかった。背景には、指揮者や楽団員が斬新な書法を十分に消化しきれなかったことに加え、断片化されたモチーフが連なる展開が、当時の聴衆には容易には受け入れられなかったという事情がある。さらに当時のドビュッシーは婚外関係をめぐるスキャンダルの渦中にあり、私生活への反感も作品受容に影を落としたと考えられている。その後は、ドビュッシー自らの指揮による再演や国外での演奏を通じて、作品の革新性と精緻な管弦楽法が徐々に高く評価されるようになった。

この作品では、３つの楽章を通して海の多様な相貌が描かれる。ドビュッシーがここで表現しようとしたのは特定の海の情景ではなく、彼の心象風景に刻まれた、ダイナミックに変化する海の存在だった。父親が船乗りであったこともあり、幼少期から海の物語に親しんでいた彼にとって、海は強い憧れと個人的な感情を伴うイメージの源泉であったという。

『海』においては、音の絶え間ない運動の中に象徴的なモチーフが繰り返し現れ、リズムが少しずつ変化する。全音音階や旋法的な響きによって調の重力が薄められて、音楽は揺らぎ続ける。そこには、海の動態と明暗、一様にとどまらない自然のありようが一瞬一瞬に刻み込まれている。

第１楽章：海上の夜明けから真昼まで

夜明けを告げるチェロにつづいて、ミュートを付けたトランペットとホルンが象徴的なモチーフを奏でる劇的な幕開け。刻々と変化する海の動態と光の変化が、巧みな管弦楽法によって捉えられている。

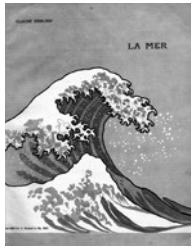
第２楽章：波の戯れ

気まぐれな調子で細やかに動き回るスケルツォ。短い動機が連鎖的に現れては消え、絶えず変化する水面のきらめきを想起させる。

第３楽章：風と海との対話

低弦による不穏な音響で始まり、荒ぶる海の様子が描かれる。第１楽章のモチーフも回帰しながらうねりを増し、壮大なスケールのクライマックスへと向かう。

作曲：1903 ― 1905年
初演：1905年10月15日、パリ
使用楽譜：Kalmus
編成：フルート２、ピッコロ、オーボエ２、イングリッシュホルン、クラリネット２、ファゴット３、コントラファゴット、ホルン４、トランペット３、コルネット２、トロンボーン２、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、トライアングル、ドラ、グロッケンシュピール、ハープ２、弦５部



1905年に出版された初版スコアの表紙には、葛飾北斎の《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》が用いられている。原画にある一隻の舟が取り除かれている点も象徴的。具体的な物語や視点を排し、より普遍的な海のイメージへと開かれた作品であることを示しているのかもしれない。

演奏会のご感想をお寄せください

6月12日／第440回 定期演奏会のご感想はこちらから →